

\*この掲載論文には著者校正がなかったため、例文や文献など、編集上のミスを手で修正した上でコピーしました。  
(松下)

## 中国語を母語とする日本語学習者のための 語彙学習先行モジュールの提案

### ～第二言語習得理論、言語認知、対照分析、 語彙論の成果を踏まえて～

桜美林大学 松下達彦

よく知られているように、中国語母語の学習者(以下「中国人学習者」)の場合、中国語の知識は日本語漢字語彙習得の面で転移する。そして語彙面での転移は、日本語習得の全体に影響する。山本(1994)によれば、上級の聴解力の下位知識として最も大きな一部を占めるのは語彙力である。現代日本語の常用語彙の約50%が漢語で<sup>①</sup>、その約半数が現代中国語と類似の意味・用法を持っている<sup>②</sup>とすれば、その影響は相当に大きく、中国語知識の転移が語彙習得、ひいては文法習得や日本語習得全体に影響するであろう。

漢字という表意文字を媒介とした転移として、例えば「\*先生は私をよく関心します」という「負の転移」(誤用を産出する母語知識の利用)が見られるが、これは中国語の「关心」/guanxin/(「面倒を見る、世話をする」の意)を、日本語の中で用いた例である。重要なのは、これを「音声として聞いたことがない」場合にもこのような誤用が起こり得ることである。すなわち、[面倒を見る](意味)→「关心」(中国語の文字表記形態)→「関心」(日本語の文字表記形態)→/kansin/(日本語の音声形態)という転移が起こる。一方、「正の転移」(正用を産出する母語知識の利用)もある。中国語母語話者が日本語で[(その列車は)5分間、停車した]と言いたい場合に、「停車」/teishā/という表現を知らなかったとしても、「停止」「発車」などの語彙を学習済みで「停」/tei/、「車」/shā/という漢字の読みを知っていれば、中国語には

「停車五分钟」という表現があるので、「停車」は中国語で「停車」だから日本語では「停車」/teisha/かもしれないという類推が働く。これは無意識の転移としても、意識的に使用するストラテジー(中国語で「策略」としても考えられる。「「停車」ということばがありますか」と確認した上で使えるのである。

このように音声入力のない場合にも漢字を媒介として転移が発生し、しかも作文ばかりでなく会話でも発生する。これは欧米ではほとんど扱われない第二言語習得の問題である。

一方、日本語と中国語の対照研究は70年代末から盛んに行われてきたが、言語習得研究に裏付けられた応用は十分ではない。1957年のLadoの対照分析仮説以降、対照分析や誤用分析が次々と行われ、その結果、誤用には第一言語知識の転移(母語干渉)のほかにも多様な原因があることがわかってきた。また、誤用がなくとも回避(難解な表現を避ける現象)があれば、学習者の第二言語発達は一定の段階で停滞する。対照分析や誤用分析は重要だが、それらを第二言語習得理論の中に正しく位置づけた上で、その成果を、カリキュラムや教材にどう反映させるかを考えるべきである。

本稿は、上述のような転移のあり方が日本語習得の全体に影響することを重視し、第二言語習得理論、言語認知の成果を踏まえ、表記上の同形語の研究(文化庁(1978)、柳(1997)、魯(2000)、翟(2000)等多数)など、語彙面での対照研究の成果をうまく応用

すれば、中国人学習者は従来よりも有効に日本語習得を進められると考え、中国人学習者のための新しい学習・教育方法として「語彙学習先行モジュール」を提案し、モジュールの部分例を提示する。

### 1. 提案と論拠

本稿の主要な提案の内容は、「中国語を母語(もしくはそれに準じる言語)とする学習者がそろっている教育環境において、日本語の語彙学習をモジュール化(言語学習を構成する一部分として独立して学習を進めること)し、特に初級後半あたりから文法学習の進度よりも先行して習得を進めるようにする。特に、日本語教育の中上級語彙のうち、使用頻度が初級語彙より劣る語彙でも、中国人学習者に学習しやすい語彙で、幅広い場面で使用できる語彙であれば初級段階で学習するようにする。また、学習者の専門領域に応じて、学習しやすい語彙は早い段階で学習するようにする。」ということである。

以上の提案を構成する各論とその論拠について、以下に説明する。

#### 1-1 語彙学習のモジュール化

モジュールは中国語で「模块」「组件」等と訳され、全体を構成する独立の一組織を指す。白畑ほか(1999)では「モジュラー性」について(人間の認知の仕組みが)「相互に作用し合う、いくつかの下位区分(モジュール)によってでき上がっていること」と説明しており、言語モジュールは空間認知などの他のモジュールから独立し、さらに語彙、文法、意味などの下位モジュールに分かれるという。言語学においては、言語能力のモジュラー性の主張は、神経言語学、言語学、心理言語学に見られるという(Bussmann 1996)。また、Cook(1996)もChomskyの理論を引用しながら、近年の言語理論の応用において語彙学習の重要性が増すことを予測している。Carroll(1999)は特に発話理解においてモジュラー性を主張している。また、中国人学習者にとって漢字語学習は既存の認知スキーマを利用する学習なので無意味な暗記ではない。

問題は語彙を学習した後それを現実の場面で使えるようになるかどうかだが、まずは、語彙学習の際に語彙が学習者個人にとって有意義な具体的例

文とともに提示されることが必要である。それでも教室における学習が習得に直結すると断言はできないが、本稿は「弱いインターフェイスの立場」(学習したものは習得のきっかけになるという考え方、Krashenの学習習得仮説に対する反論)を支持するので、語彙学習を先行させ、その語彙を使った文法学習、さらには聴解、会話、読解、作文などの統合的活動を行えば、習得は有効に進むと考える。

#### 1-2 語彙学習を文法学習の進度よりも先行させること

宮崎(1998)は、第二言語習得におけるインプット(中国語では「輸入」)、アウトプット(中国語では「輸出」)、インターアクション(中国語では「应对」「互动」)の役割をめぐる仮説を総括し問題点を検証した上で、インターアクションにおける調整の役割の重要性を主張している。いずれの立場に立とうとも、語彙が現実のコンテキストを構成する重要な要素の一つであることは間違いない。語彙が多いほど理解可能なインプットを与え、反応を引き出し、豊富な話題について習得に有効なインターアクションを産み出せる。文法の学習にあたって豊富なコンテキストを用意できれば、それだけ豊富な種類の有意義な例文・タスクを使えるはずである。例えば、初級文法の難点である受け身、使役や条件文(ト、バ、タラ、ナラなど)の学習を、中級以上の語彙を用いて、より豊富な例文で学習できる。中国人学習者にはそれが可能である。

#### 1-3 いわゆる中級語彙や専門的上級語彙の初級段階での教授

「初級」や「中級」の語彙とは、どう決められるのだろうか。各種の語彙表には、語彙調査に基づくもの、専門家の主観的判定によるもの、その組み合わせ等があるが、いずれにせよ使用頻度を基本に考えることが一般的で、加えて幅広い分野で用いられること、意味的な基礎性などが考慮される。

しかしながら、学んだことばをすぐに日常生活で使う必要のない非日本語圏においては、必ずしも頻度の高い語彙から学習する必要はない。

使用分野にしても、幅広いことが望ましいのは当然だが、専門分野であっても、学習目的に合致するな

らば早くから導入したほうがよい。特に非日本語圏での学習では、その学習目的が学習・研究のためであることも多い。

中国人学習者のあいだには、日本語は漢字があるので簡単そうに見えるが勉強してみると難しい、という声がよく聞かれる。それはある一面正しいが、正しくない面もある。なぜなら日中両語の語彙は自然科学・社会科学などの専門分野の語彙(明治期に日本語として造語され中国に逆流入した「新漢語」、鈴木(1981)など)において共通性が高く、日常語彙において低いので、中国人学習者の優位性が発揮できるのは、中級以上とされている論理的、抽象的、専門的な言語活動においてだからである。さらに宮島(1994)は「大部分の同形語では、意味や文法的性質とともに、文体的性質も、むしろ似ている」と述べている。本稿はこのような優位性を少しでも早い段階で発揮できるようにすることを主張する。具体的には、使用頻度が初級語彙より劣る中上級語彙でも、中国人学習者に学習しやすく、幅広い場面で使用できる語彙であれば初級段階で学習することである。また、学習者の専門領域の語彙は早い段階で学習すべきである。語彙習得を先行させれば文法習得を容易にできる。これは日本語を専門とする学生にも有効だが、日本語非専門の学習者には決定的に有効である。通常は初級で和語の多い基本語彙を多く学ぶが、中国語母語話者にとって語形変化が多く語順も中国語と異なる日本語文法は難しく、特に初級後半で学ぶ受け身や使役などは十分に定着しないままに中級へ進む学習者が少なくない。中級漢字語彙の初級段階での教授は、それを解決する一つの有力な方法である。

また、Cumminsの主張するBICS(日常言語運用能力)とCALP(認知/学習言語能力)の習得の差異(Richardsほか(1992)など)から考えれば、経済や歴史などの分野の学生にはその分野の学習を日常会話等とは別に進めればよいことになる。BICSとCALPで共通するのは統語能力や基本語彙の能力であるが、その他の多くの点(使用場面、語彙、関連知識など)では異なっている。したがって、文法の学習にも可能な限り論理的・専門的な日本語での学習を導入し、学習者の目的に応じて専門語彙を早くから導入し、並行してBICSの学習に取り組めばよい。特に中

国人学習者の場合にはCALP的な中上級の語彙に日本語学習の優位性を発揮できるため、この方法が有効である。

例えば、初級後半の難度の高い文法項目に「使役受け身」があるが、多くの教科書に「お母さんに薬を飲まされた」のような日常言語的な例文がある。中国において使われている教科書も同様である。しかし、例えば、中国人学習者なら「大国に無理な要求を承諾させられた」という文は中上級語彙を使っても全く難しくない。このような文は歴史や国際関係で使われるはずである。

この考え方に従って、以下に、パ/ナラの条件文の例を挙げる。例えば、以下の(3)は一般の初級教科書では扱われないだろうが、中国の経済や経営管理専攻の学生であれば初級で学べる内容であろう。

#### 中上級語彙を使った条件文の例文

- \*求給部は日本語能力試験2級以上もしくは「日本語教育のための基本語彙調査」において6000語レベルまたは選定外の中上級語彙。それ以外はすべて初級(日能試3級以下)語彙である。
- \* 下線部は初級後半で問題となるような文法項目。

…パ

- (1) 努力すれば、必ず成功する。
- (2) 毎日温泉に入れば、健康になります。
- (3) 資金をうまく運用すれば、利潤率はもっとあがるはずだ。

…ナラ

- (4) 留学するなら、○○○大学がいいよ。
- (5) 握手をするなら右手でしなければならぬと言われます。
- (6) 化粧は好きじゃないけど、するなら、もっとうまくしなくちゃ。

この方法は、情意面でも有利である。「日本語はおもしろい、中国語と共通点がある」と感じて、やる気が出るのではないだろうか。

また、例文・タスクは、学習心理や学習者ネットワークの形成に貢献するものが望ましい。筆者は特

に「自己開示」(self-disclosure)の概念を例文やタスクに反映させるべきだと考えている。

#### 1-4 中国人学習者にとって学習しやすい日本語の語彙とはどんな語彙か

いわゆる「同形同義」(表記上の同形、基本義の対応)の語は本当に習得しやすいだろうか。第二言語習得の情報処理モデルの主張によると、(意味・用法が) ①一致するものが最も習得しやすく、その次が ②全く異なっているもので、最も習得しにくいのが、③意味・用法の一部が重なっているが一部がずれているものである(Richardsほか(1992)、柳(1997)などを参照)。これを中国人日本語学習者を被験者にして確かめた実験的手法による研究に玉岡・松下(1999)がある。これによれば、「意味・用法が日中で共通している同形漢字語」は「日本語にしか存在しない漢字語」よりも速く脳内で処理できる。また、「中国語に存在し日本語に存在しない漢字語」を、日本語に存在しない語として否定するのは、「日本語にも中国語にも存在しない無意味漢字語」を否定するよりも時間がかかり、誤答率も著しく高い。これらは日本語の漢字語の脳内における認知処理において、母語の中国語の影響が正負ともに認められることを意味する。いわゆる同形同義語はやはり習得しやすいのではないかと推測される。

また、玉岡・松下(1999)は、日中で対応する漢字の字体の相違は意味の面ほど大きな影響はなく、一部の大きく異なるものだけに注意すればよいことを示唆する。音声形態についても上級者では母語の影響がないことを報告している。

問題は意味・用法において、一致するものとずれているものをどう区別するかで、意味・用法が完全に一致する語句は厳密にいえばほとんどないが、それでもここではそのような相違を無視することを主張する。プロトタイプ理論では人間は典型的用法から習得し、それから次第に微細な意味・用法を認知するようになるという(白畑ほか(1999)など)。微細な差異ほど転移しにくいと考えられる。

また、Chomskyらの普遍文法モデルやその関連の研究から考えると、語の意味の学習に関しても、単なる対照の観点だけでなく普遍性との関連も考え

る必要がある。すなわち、日中で共通の場合でも、ともに特殊なら、より普遍的なものより習得が難しい。また、日中で異なっている場合、中国語のほうが普遍的ならば日本語の習得は困難であるが、日本語のほうが普遍的な場合、日中両語で異なっても習得は難しくない。

例えば、年齢について日本語では「彼は私より2歳年上だ」というように上下の隠喩(メタファー)を用いて表現するが、中国語では“他比我大两岁。”のように大小の隠喩を使用する。これなどは直観的には日本語のほうが普遍的で、中国語母語話者にとって習得の難しい表現とは考えにくい。一つのことを言い表すのに用いられる隠喩が言語により異なる場合、いずれかの隠喩がより普遍的である可能性がある。第二言語習得において普遍的でない部分(個別言語的な部分)は第一言語の影響を受ける(Cook(1996))とも言われ、その意味では対照研究は重要だが、単に相違点を記述するだけでなく、その相違点のどちらがより普遍的かを、考えねばならない。その上で、各種の語彙を、基本義、文体的意味(位相)、統語機能、文字表記などの観点から、中国人学習者にとっての学習しやすさの観点から分類することが重要であろう。

以下、「中国人学習者にとっての初級学習可能語彙」(基本義と基本的用法が日中両語で一致する同形漢字語、ただし字体の差は原則として問題にしない)の具体例を提示する。

#### 中国人学習者にとっての初級学習可能語彙(一部例)

##### ・日本語能力検定試験2級(中級)レベルの語の例

握手、胃、以前、違反、印刷、応用、温泉、温度、化粧、国籍、黒板、修理、地球、努力、農業、圧縮、緯度、医療、温室、悪魔、委員、意識、一致、引用、運河、永遠、営業、液体、宴会、延期、園芸、援助、演説、演奏、延長、温帯、歌手、紅茶、首都、数字、停車、電池、博物館、秘密、離婚、留学……

##### ・日本語能力検定試験1級もしくは範囲外(上級)の語の例

圧倒、運用、応急、黄金、暗殺、一部分、意図、移民、衛星、英雄、悪夢、遺産、遺伝、違法、王国、恩人……(以上、A行のみ。カ行以降にも大量にこの種の語彙がある。)

2. まとめ

カリキュラムや教材の設計に際しては、心理学、社会学、教育学、言語学など幅広い角度から検討し、具体的な学習者や学習環境によって統合することが必要だが、この方面にはまだ多くの研究の余地がある。

漢語の母語知識の利用が日常的基本語彙習得をおろそかにする結果になってはいけないし、負の転移の軽視になってはいけないが、正負の転移はいずれにせよ発生するし、漢字の認知処理でみる限り、その影響は上級者にも残る(玉岡・松下(1999))。し

たがって、利用できる母語知識は早々に利用し、同時に負の転移を意識的に克服するプログラムを設けるべきである。

本稿は仮説の組み合わせによる提案なので、将来的にはこのモジュールの考え方に基づく教材およびプログラムを開発、実施して効果を検証したい。

\* 本稿は中国大学日語教学研究会《中国日語教育的世紀回顧与展望》国際研討会(上海・金沙江大酒店、2001年7月9日)での発表内容に加筆・修正したものである。

注

- ① 国立国語研究所(1964)は異なり語数の47.5%が、延べ語数の41.5%が漢語であると報告し、国立国語研究所(1984)は基本語六千のうち46.9%を漢語と報告している。これに混種語の漢語成分を加えれば、日本語の現実の書きことばの語彙の50%前後が漢語であると考えられる。
- ② 文化庁(1978)では用法や文体に大きなずれがあるものも同義・類義としているため3分の2を類義としているが、荒川(1979)や松岡(1979)で批判されているように、実際には厳密に一致するものは少なく、基本義の一致に限って半分程度と考えるのが妥当であろう。

参考文献 \*出版年次順

1. 『現代雑誌 90 種の用語用字Ⅲ分析』	国立国語研究所	秀英出版	1964
2. 『中国語と対応する漢語』 文化庁(早稲田大学語学教育研究所日本語科)		大蔵省印刷局	1978
3. 『愛知大学文学会文学論叢』「中国語と漢語 - 文化庁『中国語と対応する漢語』の評を兼ねて」	荒川清秀	愛知大学文学会	1979
4. 『中国研究月報』「日本語教育「村」と中国語教育「村」 - 文化庁『中国語と対応する漢語』をめぐって -」	松岡榮志	中国研究所	1979
5. 『日本漢語と中国』	鈴木修次	中央公論社	1981
6. 『日本語教育のための基本語彙調査』	国立国語研究所	秀英出版	1984
7. Richards, J., Platt, J. & Platt, H. (1992) "Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics" Longman Group UK Ltd. (菅燕紅译(2000)《朗文语言教学及应用语言学词典》外语教学与研究出版社)			
8. 『語彙論研究』「日中同形語の文体差」	宮島達夫	むぎ書房	1994
9. 『日本語教育』「上級聴解力を支える下位知識の分析—その階層化構造について—」	山本富美子	日本語教育学会	1994
10. Bussmann, H. 著, Trough, G. P. & Kazzazi, K. 英訳(1996) "Routledge Dictionary of Language and Linguistics", Routledge			
11. Cook, Vivian (1996) "Second Language Learning and Language Teaching" 2 <sup>nd</sup> Edition, Edward Arnold Ltd. (高远导读(2000)《第二语言学习与教学》外语教学与研究出版社)			
12. 『日语知识』《关于日汉同形近义词(上)(下)》1997年第6期、第7期	柳納新		1997
13. 『早稲田大学日本語研究教育センター 紀要』11 「第二言語習得理論における調整、意味交渉およびインプット」	宮崎里司	早稲田大学日本語研究教育センター	1998
14. 『英語教育用語辞典』	白畑知彦ほか	大修館書店	1999
15. 『中国語系日本語学習者による日本語漢字二字熟語の認知処理における母語の影響』第4回国際日本語教育・日本研究シンポジウム「アジア太平洋地域における日本語教育と日本研究:現状と展望」			

## 注

- ① “定式思维”，日文为「ステレオタイプな見方」，「ステレオタイプ」stereotype 为：ステレオタイプとは型にはまった考え方を意味するが、もともとは印刷術に関する言葉である。18世紀末にフランスの印刷業者ティドーがドイツのヘルマンとともに発明した鉛板による印刷方法。大量に印刷できるように、活字から直接印刷するのではなく、紙型を取り、それを基に鉛板をつくり印刷機にかける手法である。この言葉を社会心理学で使ったのがW・リップマンで、1922年刊行の著書「世論」(Public Opinion)の中で用いている。つまり、われわれには物事を見てから定義しないで、定義してから見る傾向があり、その定義も自分の文化に基づいて行われるきらいがあるという。今日このことは、各国間の文化、経済摩擦の「元凶」の1つといえよう。

(『異文化コミュニケーションハンドブック』P254)

## 参考文献

- |                                    |         |        |            |
|------------------------------------|---------|--------|------------|
| 1.『異文化コミュニケーションハンドブック』[M]          | 石井敏等    | 有斐閣    | 1997       |
| 2.『日中比較文化論』[M]                     | 鄭麗芸     | 駿河臺出版社 | 1999       |
| 3.『異文化とコミュニケーション』[M]               | 島崎裕巳    | 日本評論社  | 1992       |
| 4.『異文化摩擦の根っこ』[M]「スリーエーネットワーク」      | 板板元     |        | 1988       |
| 5.『異文化コミュニケーション』「キーワード」[M]         | 古田暁等    | 有斐閣    | 1995       |
| 6.『人民中国』[J]                        | 人民中国雑誌社 |        | 2000.8     |
| 7.『異文化間コミュニケーションにおける文化能力養成について』[J] | 陳岩      | 北星論集   | 2001(3):39 |

责任编辑：李爱文

(上接第54页)

- 玉岡賀津雄・松下達彦 (香港理工大学)、配布資料 1999
16. Carroll, David W. (1999) "Psychology of Language" 3<sup>rd</sup> Edition, Brooks/Cole Publishing Company (桂诗春、董燕萍导读(2000)  
《语言心理学》 外语教学与研究出版社)
- 17.《汉日同形词对比研究与对日语教学》北京外国语大学国际交流学院编《汉日语言研究文集(第三集)》  
鲁宝元 北京出版社 2000
- 18.《汉日同形词的褒贬色彩与社会文化因素》《日语学习与研究》2000年第2期 翟东娜 2000

责任编辑：李爱文

